食の選択とライフスタイル・経済システム・学問と協働の世界

平川　秀幸　大阪大学　コミュニケーション・デザインセンター　准教授

［講演の概要］

近年、食の安全が私たちの暮らしと社会の中でますます大きな問題になっています。マスコミでも、BSE（牛海綿状脳症）や違法残留農薬、偽装表示など、さまざまな問題が次から次へと報じられ、食の安全に対する懸念は深まるばかりです。そして、もう一歩踏み込んで考えてみたとき、私たちに最も身近な食の安全の問題は、食生活や暮らし方、働き方の問題や、さらには食糧安全保障、エネルギー問題、環境問題、経済システムの問題など、遠く離れた世界にも広がる問題と複雑に絡みあっていることが見えてきます。

たとえば戦後一貫して進んできた食事の欧米化や肉食化によって、コメ消費を初めとして食料自給率は大幅に下がり、輸入への依存が強まりました。その結果、輸入食品の違法残留農薬問題のように食の安全が脅かされているだけでなく、食糧生産の燃料となる原油の値上がりや、バイオ燃料用と食糧用の農作物生産の競い合いによって、食品の値段も高くなり、家計を直撃しています。そしてこれらの値上がりの背景には、原油や穀物をめぐる投機的な先物取引の動向や、地球温暖化の問題があります。また肉食の拡大は、家畜飼料となる穀物をより多く消費し、より多くの農地を必要とするため、森林伐採が広がり、地球温暖化を促進する要因にもなっています。さらに、日本にも多くの穀物を輸出している米国中西部の農業は、氷河時代の名残の地下水に頼っていますが、この水は半世紀後には枯渇してしまうともいわれています。

このように食を通じて私たちの生活とその未来は、世界の様々な問題とつながっています。それらはどれも、自然科学や工学、人文・社会科学の多様な分野の研究者や、政府や産業界、市民社会の様々な立場の人たちとの協働を必要とする深刻な問題ばかりですが、誰にとっても取り組む価値のあるチャレンジングな問題でもあります。

［プロフィール］

国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程単位取得退学。財団法人政策科学研究所客員研究員、京都女子大学現代社会学部講師・助教授を経て、現職。専門は科学技術社会論（Science, Technology and Society; STS)、とくに食品リスクに関する政策と科学の関係に注目。共著に『科学技術ガバナンス』（東信堂、2007)、『科学技術社会論の技法』（東京大学出版会、2005 年）など。